

昭和の南海地震体験談

氏名:丸山 好子(まるやま よしこ)

生年月日:大正13年2月17日

地震を体験した場所:広川町・自宅2階の寝室

当時の家族状況:父、妹、兄嫁(兄は戦死)、姪、
甥



1) 地震発生時の状況

自宅2階の寝室で就寝中に強い揺れで目が覚めた。逃げようとするが思うように立てず、壁や柱につかまりながら移動を試みたが、1階に降りる前に揺れが収まった。被害は無かった。

2) 津波襲来時の状況

様子を見に来てくれた父親と2階で話をしていたら、外で隣のおばさんが「おまんら(あなた達)、津波やで！逃げやなあかんで！」と声をかけてくれた。おばさんは地震の後に津波が来るかも知れないと思って、海の様子を見に行っていた。帰り道、通りがかりに声をかけてくれたので、家族全員が広八幡神社に避難することになった。当時、職場で出納と会計を担当しており、前日の保証金を主任指示で預かっていたので責任を感じた為、家族を先に送り出した。手で持って行けるように風呂敷できっちり縛る間だけ遅れたが、そのおかげで波が引いた後に移動することができ、広八幡神社に無事避難できた。避難途中、海の方から耐久方向へ覆い被さるような津波を目撃した。地震＝津波の認識はあったがまさかと思っていた。



3) 家族の行動・被害

疎開して近所に住んでいた姉と一緒に避難することになり、姪の手を引き先に出た。日東紡の辺りまで行った時、波が来て流されてしまった。2人は離れてしまって、姪が鉄橋の下に引っかかって亡くなり、姉は流される途中、田んぼの中の何かにつかまる事が出来て助かった。自宅療養中だった妹は避難途中で倒れてしまい、通りすがりの人に神社まで連れて来てもらった。父親は避難道の側溝に落ちてしまったが、杭につかまり、自力で抜け出し避難した。

当日の夜は、神社近くの母方の親戚の家に泊まったので、自宅に戻ったのは翌日だった。家の中に水は入ってきていたが少しだけで、生活していた裏の離れまでは水が来ず、庭までだった。玄関先に置いていた用水のコンクリート製の水入れが流れの勢いで斜めに道路の方へ動いていた。

4) 集落・周囲の被害

近所の男の子が1人亡くなったと聞いた。若い娘の頃だったので、周囲と話することが無く、状況は何も知らなかった。

5) 地震・津波後の生活

当日の1泊のみ、神社近くの母方の親戚の家に家族全員で泊まった。家屋被害が無かった為、自宅で特に変化無く生活が出来た。地震の後から井戸の水がカラカラになり、濁った。近所の井戸でも同じような現象が起きていたが、いつの間にかもとに戻っていた。使えないときは隣の畑のポンプの水をもらった。地震後すぐに結婚したので前後の変化に気付かなかった。

6) 次の災害への備え

枕元や、よくいる部屋に懐中電灯を置き、停電等の非常時に使えるようにしている。ペットボトル入りの水を常備し、毎年新しいものと交換している。2階部分に避難する事も想定し、1、2階に分けて置いている